

プログラム・ノート

寺西基之

ショパン：チェロ・ソナタ ト短調 作品65

フレデリック・ショパン(1810～49)はピアノ曲以外の作品も幾つか手掛けているが、そのほとんどは初期に集中している。しかしこのチェロ・ソナタだけは晩年の1845～46年の所産で、作曲者の生存中に出版された最後の作品となった。中期以後ほとんどピアノ独奏曲だけに自らの表現の場を見いだしてきた彼が、晩年になってチェロのためのこうした大作を手掛けた背景には、フランスの名チェロ奏者オーギュスト・フランショム(1808～84)の存在があった。フランショムはフランス移住後のショパンを支え続けてくれた親友だった。ショパンは長年のそうした友情に報いるべく、フランショムのチェロの技巧と自分のピアノの表現力が發揮できるようなソナタを書いたのである。深い幻想的な趣を感じさせるその作風は後期のショパン特有のもので、ロマン派時代に書かれたチェロ・ソナタの代表作のひとつとして演奏される機会の多い作品である。

第1楽章は自由なソナタ形式で、チェロとピアノが表情豊かに絡み合っていく。第2楽章は活気溢れるスケルツォ。第3楽章は夜想曲風の短い緩徐楽章。第4楽章は2つの楽器が情熱的にぶつかり合うフィナーレである。

ブラームス：チェロ・ソナタ第1番 ホ短調 作品38

ヨハネス・ブラームス(1833～97)は2曲のチェロ・ソナタを残している。どちらもブラームスらしい渋い味わいを持った名作だが、後期の第2番へ長調がどこか達観したような明澄さを示しているのに対し、中期に書かれたこの第1番(作曲は1862～65年)は、短調の暗い色調、チェロの低音域の深い音色、哀感を秘めた曲想などを生かした物寂しいロマン的叙情が支配的である。一方でチェロとピアノの緊密な関係や全体の論理的構成がいかにもブラームスらしく、また彼が力を入れていたJ. S. バッハ研究(特に『フーガの技法』)との関わりが指摘されている。

第1楽章はチェロの低い音域で奏される沈鬱な第1主題(バッハの『フーガの技法』のコントラプンクトゥスIVを下敷きにしている)、激情的な第2主題、慰めのような小結尾主題などを中心に展開する厳肅なソナタ形式楽章。第2楽章は軽快ながらも寂しげな情感を湛えたメヌエット風の中間楽章。第3楽章はフーガ書法などのポリフォニックな技法を取り入れた情熱的なフィナーレで、『フーガの技法』のコントラプンクトゥスXIIIに基づいた切迫感のある第1主題が楽章の性格を決定づけている。